

文部科学省 平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「20世紀日本における知識人と教義—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」

## 第16回 丸山眞男文庫記念講演会

# 丸山眞男と「アメリカ問題」

講師 古矢 旬氏

(北海商科大学教授 北海道大学名誉教授)

日程: 2015年11月27日(金)15:00~16:30

会場: 東京女子大学構内 (教室は当日正門前に掲示)

## 第2部 丸山眞男文庫の現在

### —バーチャル書庫と草稿類デジタルアーカイブの紹介—

※講演会終了後の30分程度を予定しております。

申込不要・入場無料

【問合せ先】東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センター

〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1 Tel: 03-5382-6817 Fax: 03-5382-6120

E-mail: marubun@lab.twcu.ac.jp

HP: <http://www.twcu.ac.jp/facilities/maruyama>

- JR西荻窪駅北口より徒歩約12分
- 西荻窪駅北口より吉祥寺駅行きバス「東京女子大前」下車
- JR・京王井の頭線吉祥寺駅北口より西荻窪駅行きバス「東京女子大前」下車



## 講演の概要

丸山眞男とアメリカとの関わりについては、すでにこれまで入江昭、清水靖久、油井大三郎各氏をはじめとする方が、当センターの企画にかかる講演会や研究会等において、報告をされている。これらの報告以外にも、丸山の直接、間接の、また個人的、学術的な「アメリカ経験」に多少とも言及する丸山眞男研究は少なくない。そのことは、丸山の学究生活が、アメリカ合衆国を最大の方当事国とする太平洋戦争と冷戦という国際政治の大枠の内で展開してきたことを思うならば当然といえるかもしれない。政治学者としての、また知識人としての丸山が、主たる学究対象、批判対象としてきた日本政治は、その間（そして今日もなお）まさに合衆国によって翻弄されてきたからである。

しかし他方で、このアメリカの影の濃さと大きさに比するとき、これまでの丸山眞男研究において論じられてきた丸山の「アメリカ問題」認識は、やや断片的、あるいはエピソード的な印象を免れない。それは、あるいは「アメリカは分からぬ」「アメリカは不可解である」という丸山自身のアメリカに対する学術的、文化的な違和感に由来するのかもしれない。この点も含め、丸山は、その世界認識、歴史認識において、「アメリカ」をどのような枠組みの内にとらえ、その存在意義を自らの政治思想史研究の中にいかに位置づけていったのかを試論的に検討してみたい。

## 講師プロフィール



1947年、東京都生まれ。現在、北海道大学商学部教授、北海道大学名誉教授。専攻はアメリカ政治外交史。著書に、『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナリズム』（東京大学出版会、2002年）、『アメリカ　過去と現在の間』（岩波新書、2004年）、『ブッシュからオバマへ——アメリカ変革のゆくえ』（岩波書店、2009年）、『アメリカ政治外交史 第二版』（齊藤眞との共著、東京大学出版会、2012年）などがある。近年の業績として、丸山眞男『超国家主義の論理と心理 他八篇』（岩波文庫、2015年）の編著がある。

## 第2部 丸山眞男文庫の現在

東京女子大学は、2012年度より、丸山眞男文庫の資料にもとづいた研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」を開始しました（文部科学省平成24年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択プロジェクト）。このプロジェクトは5年間にわたって2つのテーマを軸として研究を進めています。

この第2部では、テーマの1つ「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」の成果にあたる、バーチャル書庫（2015年3月公開）と草稿類デジタルアーカイブ（同年6月公開）について当文庫スタッフがご紹介いたします（HP：<http://www.tweu.ac.jp/facilities/maruyama/project/>）。

### 丸山眞男文庫とは

日本政治思想史の研究を中心に、政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山眞男は、戦後の日本を代表する知識人でありましたが、その思索の跡を伝える約2万冊の蔵書と約3万頁の草稿類が1998年に東京女子大学に寄贈されました。東京女子大学は、日本における丸山眞男研究の拠点となり、貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会、公開研究会、公開授業等を開催しています。

第16回 丸山眞男文庫記念講演会

丸山眞男と「アメリカ問題」

古矢 旬（北海商科大学）

はじめに——課題にどう近づくか

right と privilege

right の「アメリカ」→privilege の否定から出発した国家

1 現代世界における「アメリカ」とアメリカ研究

- 「アメリカの世紀」と「丸山眞男の時代」
- 日本のアメリカ研究と丸山眞男——「アメリカ」への二つのアプローチ（史実と理論）
- 現代世界におけるアメリカ・イメージの多面性（「建国の理念」の現代化と世界化？）
  - ①自由民主主義世界の最終的救い手としての主権国家「アメリカ」  
——「生命」と「自由」
  - ②大量生産、大衆消費の先行的実例としての資本主義「アメリカ」  
——「幸福追求権」の現代化
  - ③大衆社会の先駆的現象としての「アメリカ」社会——「平等」と「他人指向型社会」
  - ④機械文明の先端的狙い手としての「アメリカ」文明——物質主義と pragmatism
- 「アメリカ問題」

2 丸山眞男における「アメリカ」への経路

Cf. 入江昭「丸山眞男先生とアメリカ」『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』、創刊号（2005年3月）、53—57頁。

アンドリュー・バーシェイ「社会学者・丸山眞男」、同上、58—62頁。

油井大三郎「丸山眞男とアメリカ文化の交錯」、同上、第10号（2015年3月）、20—30頁。

清水靖久「丸山眞男と米国」『法政研究』（九州大学法政学会）、第74卷第4号（2008年3月）。

- 父丸山幹治（1914～1916年アメリカ駐在特派員）／長谷川如是閑のアメリカ批判  
「父幹治が、民衆的で親米派だった…」『回顧録』下、10頁。  
「如是閑さんと父と私」『集』⑩、125—218頁。
- 1920年代のアメリカの大衆文化：ジャズと映画

- 高木八尺——「アメリカ理解」と「アメリカ批判」
  - ヘボン講座——戦前・戦中における日本のアメリカ認識にとって「一つの窓」
  - 『米国東洋政策の史的考察』(1947年) 太平洋問題調査会(IPR)
  - 高木のアメリカ理解(ピューリタニズムとフロンティア)(その結合のはらむ矛盾)
    - ピューリタニズムと理神論やユニタリアンとの対抗／幸福の追求権の歴史的展開
      - アメリカ思想の実学的プラグマティズムと体系理論の不在
    - アメリカの福音主義のはらむ反知性主義、反エリート主義、ポピュリズム的性格
    - アメリカ・キリスト教の原理主義への「逆行」という側面(「産業化」「近代化」への反動として)
- 西廻りの「アメリカ」／東廻りの「アメリカ」 Cf. ヨーロッパからの亡命知識人
  - 「もともとアメリカというものをまったく知らなかつたし、いまでもアメリカはわからないところだなと思っています。・・・おまえはヨーロッパの過去を理念化してそれを普遍化している、と言われたら、わたしはまったくそのとおりと言うほかない。」(『談』⑦、111頁)
- 日本とドイツの破局を思想史的にどう理解するか——ナショナルな政治文化比較
  - 1) 日本とドイツ→「超国家主義の論理と心理」「軍国支配者精神形態」
  - 2) ドイツとアングロ・サクソン
    - 近代国家における国家主権と個人の基本的人権との対立的統一(「権力と道徳」『集』④、272頁)
      - イデオロギー的には、「国家理性」の優位か「自然法思想」の優位か
      - 「権力の苛烈な追求と人道主義的な要請との間に巧みにバランスをとる術を伝統的に心得ているアングロ・サクソン民族に対するドイツ人の——これまた伝統的な——偽善者呼ばわり」(同、277頁)
      - 「アングロ・サクソンが政治的国民だといわれる所以はつまりこの権力と倫理との不断の媒介に長じているということなのです。」(「政治学入門」『集』④、250頁)
    - 3) ヨーロッパとアメリカ
      - 多元主義と立憲主義
      - 「ロックを通じてアメリカ独立宣言に流れ込んでいった契約説がピューリタン的信仰に深く底堅かれていることは周知の事実であり、革命は地上におけるアピールの手段を奪われた植民地人民の神へのアピールとして肯定されたのである。そうして平等な成員の自発的結社(voluntary association)としての教会と、権力と服従の強制組織(compulsory organization)としての国家を観く区別し、後者をやむをえざる害悪とするロジャー・ウィリアムスらの思想こそは、国家と社会の二元論に基づいて権力を不斷にコントロールする必要を説く自由主義国家の原型となつたのである。」(「権力と道徳」同、271-272頁)

#### 4) イギリスとアメリカ

「行政機能が…社会生活のあらゆる面に網の目のようにはりめぐらされるようになると、いわば政治全体が著しく社会技術としての性格を帯びて来ます。そこでは自ら政治学の体系も国法学と結びついた権力論が背景に退いて、市民生活と日常的に接する技術的側面が重視され、むしろ行政学と癒着するようになるわけです。こうした傾向が最も顕著にあらわれているのはやはりアメリカです。…私はアメリカ政治学の方法論においてテクノクラティックな考察の肥大とともに政治の権力的、乃至暴力的機械が動もすると軽視される傾きがあるのは、政治学としてはやはり一面的であると思うのです…」（『政治学入門』同、248-249頁。）  
「彼(ヘンリー・キッシンジャー)がくりかえし強調したのは、大国の政治機構の巨大な官僚化が外交政策の決定過程にいかに危険な結果を及ぼすかという点であった。テクノクラットの独裁傾向がまさに政治的叡智の貧困と正比例している病弊をするどく衝く「豪傑者」としてこの国際政治学者が現れたのは、私にはむしろ意外の感を与えた。」（1965年6月コモ湖畔ラジオでの国際会議）（『船酔い』『集』⑨、323頁）

#### 3 福沢諭吉とトクヴィル

- 「福沢諭吉訳(1866年)『アメリカ独立宣言』解題」（『集』⑩、125—139）～『西洋事情』（1866～1870年刊行）→アメリカのデモクラシーを「純粹の共和政治」として理想化（岩波新書、上、241頁）
- 『文明論之概略』を読む』の「アメリカ」（ミル～トクヴィル）  
→(西欧との分離と未分離)  
多数の暴政／世論の圧政／分権論／異端・邪説への寛容／自由競争の資本主義／自發的集團／金儲け万能主義／先住民懲戒／愛国心
- マッカーシズム——冷戦と反共主義→議会主義立憲主義の危機

#### 「自由の名による自由の抑圧」

丸山における「ファシズム・イデオロギー」の要素

「例えば個人主義的自由主義的世界觀を排するとか、あるいは自由主義の政治的表现であるところの議会政治に反対するとか、対外膨張の主張、軍備拡充や戦争に対する讚美的傾向、民族的神話や国粹主義の強調、全体主義に基づく階級闘争の排斥、特にマルクス主義に対する闘争というようなモーメント——これらはいずれも独逸や伊太利のファシズムと〔日本との〕共通したイデオロギーであります…」（岩波文庫、57-58頁）

ファシズムとマッカーシズムの異同

支持基盤／「上から」・「下から」／偏見／都市型・農村型／エスニシティ／人種

／宗教・宗派／イデオロギー／人格類型／階級

Ortega y Gasset, *The Revolt of the Masses* (N.Y., 1950)

マスとテクノロジーと官僚化

「抵抗」は可能か

自発集団と地方自治／『ネーション』『ニューリパブリック』などの自由主義的雑誌／dissentersあるいはnon-conformistsの伝統

#### 4 おわりに——丸山以後の「アメリカ」

- 知識人の反米主義

大衆的物質文明(生活様式や文化的画一化)への違和感

→「見過されたアメリカ」——「ゆたかな社会」の「アメリカ・モデル」

- 「幸福（富と安全と機会）追求権」の「吸引力」

- 「アメリカの世紀」の終わりか “Morning in America” か？

- 「幸福の追求」権の変容と拡張→「安楽の全体主義」？